

兒の甚だ好むにも拘らず適當のものなきに困しめり  
以上は生後一年半までの小兒につきての經驗なり

消えぬ記憶

ひさ子

前號家庭の欄に、子供は印象を受くる事が、蜜蜂のやうで、これを永く保つことは、大理石のやうであるといふことがございましたが、誠に其通りでございませぬ。

私が九歳か十歳の時に、夏の或日、家内中で、川原にあそびに出かけました。さうすると、一人の男が、大急でかけてまゐりまして、

向の川の中に、子供が死んで居る。

と申します。私は、何だか氣味がわるくなりましたがそこが所謂、こわいもの見たし。で、兄についてかけ

出しました。さて行て見ますと、果して四歳位の男の子が、白い浴衣を着て、川の底に仰向に横つてあります。そこは、水が極淺いものですから、ありくと死顔までが分ります。此時、私はまだ子供ながらに、一種いふにいはれぬ感を起しました。

此時の、川の其邊の様子、死兒の衣服、死顔、及見た時の感じは、今にせうしても忘るゝとができません。

又私の友人、これは八歳位の時に、冬の或朝、

向の御社の便所の中に、人が首を縊てあるそうだ。

といふことをききました。そりやこそ。といふので、

これも兄さんと一しよに、かけ出しました。そうすると、其首くゝりは、もはや便所の中より出され、土の上に置かれてありましたが、そこで怪我をしたと見えて、頭には血がついて居り、をりしも積つてある雪

に、にじんでをります。これで、十分、こわい、といふ心に、

起しましたのに、そこに居つた巡査がたはひれに、  
今夜は、いかりに行くど、此人が出てくるぞ。とお  
どしました。

さあそれからといふものは、いかりに行くたびに、  
此事を思ひ出して、こわくてたまりません。いまはも  
うこわくはありませんが、それでも、其時の様を、あ  
り〜と目に見ることが出来る。と私に話したことが  
あります。

右は二ども、變死者を見ました、いやな話ですが、友  
人も私も、十六七年前に見たことを、今もなほありあ  
りとおぼえて居る、といふのは、全く、まだ軟く弱い  
心に、深くきざみこんだからであります。

して見ると、まだ幼い子供の心は、まるで蜜蠟のやう  
なもので、冷んやうでもきざみこむことができま  
す。そうして、大きくなるにつれて、心はだん〜か

たまりますが、此もやうはなかなか消えません。こと  
によると、死ぬまで消えぬかもしれせん。此點から  
いふと、なるほど子供は大理石です。即ち、小さい時  
に、つよく感じたことは、よかれあしかれ、いつまで  
も忘れせん。深くきざみつけた記憶は、容易に消え  
せん。また、これはとゞまに、しみこんだ記憶を、  
かげも形もないやうに消す、といふことは、實に六か  
しいことでございす。それも善いことならば、とに  
かく、もしも、子供の心に、いれてよくないことであ  
つたならばどうせう。

そこで、かういふことが分ります。それは、「まだ心  
の軟弱な子を、あまり強く刺激したり、ひどく感情を  
起させたり、することは、よく〜考へなければなら  
ない」といふことでございす。